

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

子どもコーナーから見えた多様なつながりの形

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小谷, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001540

子どもコーナーから見た多様なつながりの形

小谷 幸子

1 はじめに

特別展「多みんぞくニホン」が終了して、はや1年以上が過ぎた。この特展で1階の子どもコーナーを担当した筆者は展示の準備段階から、国立民族学博物館（以下、みんぱく）と自宅のある大阪府吹田市と、研究のフィールドである米国カリフォルニア州サンフランシスコ市を行ったり来たりする生活を続けてきた。海外で人類学的な調査をおこなうこと、そして日本で「日本人」として生まれ育ち日常生活を送ることは、日本国内のエスニックな共同体、およびその共同体にかかわる人びとの歴史と暮らしに焦点をあてた「多みんぞくニホン」と具体的にどのようなつながりをもっていたのか。本報告書ではこのような観点から、「多みんぞくニホン」を振り返ってみたい。

2 フィールドと「多みんぞくニホン」をつなぐもの——当事者性のあり方の多様性

サンフランシスコにはジャパントウンと呼ばれる地区がある。この場所には19世紀後半から20世紀半ばにかけて日本からの移民が多く居住し、かつては「日本人町」と呼ばれていた。今日のジャパントウンにはジャパンセンターと呼ばれるショッピングセンターを中心として、日系の商業、宗教、文化施設が集まっており、近年は中国や韓国などを出身地とする新たな移民もここを商業や生活の拠点としている。

2004年12月のある週末、このジャパントウンの一角で日本のアニメ上映会が行なわれていた。何となく立ち寄ったその場で、10代のアニメファン数人と言葉を交わすうち、筆者はジャパントウンに隣接するアフリカ系アメリカ人コミュニティ（African American community）に生まれ育ったトニー（仮名）という高校生と知り合った。2005年の8月、筆者とのインタビューのなかで、トニーはジャパントウンについて次のように話した。

“I normally walk around here. That’s part of my neighborhood and a fun place to be around. But I can’t normally do that because I usually get stared at by older people or shop owners. Because if you have noticed, you walk around Japan town, you don’t usually see black people here. Black people in some cases are not the majority who would be

interested in Japanese culture. They are conservative. They usually want to be in their own culture instead of going to someone else's. That's what I would see in African Americans and our neighborhood.”

(僕は普通にここを歩きまわったりするよ。僕の住む町内の一部だし、ぶらぶらしていてもしろい場所だし。でも、普通にはそれはできないんだ。なぜなら、たいていお年寄りの人たちや店主たちにジロジロ見られるから。ジャパントウンを歩いてみたら、もう気づいたかもしれないけれど、通常は黒人の人たちをここで見かけることなんてないよ。黒人で日本の文化に興味をもつなんて人は、そんなに大勢いないからね。保守的だから。普通、他の誰かのところに行くぐらいなら、自分たちの文化のなかにいたい。そんなふうに僕はアフリカ系アメリカ人や自分の住んでいる地区を見ていて思うんだ。[以下、英訳はすべて筆者による])

実際には、トニーがジロジロ見られて不愉快になる経験をしたのはジャパントウンだけではなくた。メキシコ出身者を中心としたラテン系の人びとのコミュニティの拠点となっているミッション地区に行っても、市内中心部にあるチャイナタウンに行っても、またトニーがコケージャン¹⁾と呼ぶヨーロッパ系の人びとが多く住む郊外の住宅街に足を踏み入れても、トニーは同じように人びとが自分を見て警戒するのを感じたと語った。そして、そのような社会的な反応に加え、さらにトニーがどうしてもなさそうに話したのは、個人的な人間関係において意識せざるをえない自分の異種性だった。それは、たとえばアジア系の友達の家に行くと、その家の親に黒人の友達は歓迎しないとされたことであったり、コケージャンとアジア系の人たちが大半を占めるアニメファンのイベントで、アフリカ系アメリカ人のアニメファンの存在を嘲笑する人たちに出会ったことだったりした。

“Somehow what I like separates me from normal people.” (どういうわけか、僕が好むことというのは僕を「普通」の人たちから引き離すんだ。)と話すとき、トニーは“Let me put on a record.” (記録に残させて。)と言って、目の前のテーブルの上に置かれていた筆者のICレコーダーに顔をぐっと近づけた。そして、声色を変えて話す速度を落とし、心持ち声のボリュームを上げて、時折、おどけたような引き笑いをまじえながら、次のような言葉を一気に発した。

“Normal. Normal is on a quotation mark. Quotation. Why is it on quotation? Because normal by definition is incorrect. Nothing is normal. You cannot call yourself normal because you are different. You're different from someone else, and you are not normal. Do not ever say you're normal because you're a special person, and you can't say that.”

(普通。普通といっても括弧つきの。括弧つき。どうして括弧つきなのかって？それは、普通というのは定義上、正しくないから。普通のことなんて何ひとつない。あなたは自分のことを普通なんて呼べないよ。だってあなたは違うから。あなたは誰かほかの人とは違って、あなたは普通じゃない。自分が普通なんて絶対に言わないで。なぜなら、あなたは特別な人間だから。だから、そんなこと言えないんだ。)

そして、トニーは生まれ育ったアフリカ系アメリカ人コミュニティで、まわりの子どもたちから、「オレオ・クッキー」²⁾ だとか「ゲイ」³⁾ だとかいう言葉でもって、変わりもののレッテルを貼られ、からかわれてきたことを話し始めた。服装やふるまい、声のトーン、話し方などが同じ年代のいわゆる一般的なアフリカ系アメリカ人の男の子たちのそれとかけ離れていることが理由なのだという。たとえば、ゆったりしたスポーツ系のファッションよりも襟付きのシャツを着るほうが好きなこと。麻薬に興味がないこと。小さいときからジャパントウンで行なわれる桜祭りに毎年、母親と出かけていたこと。自らの文化的背景について学ぶ意欲がある一方で、他の文化圏に対する関心も強いこと。人種的に異なる友達とよく一緒に時間を過ごすこと。自分自身のなかでは「普通」のこととして認識されるこれらの事柄が、自らのルーツを意識するアフリカ系アメリカ人という共同体においても、つながりを求めて足を踏み入れようとする他の共同体においても受け入れられない。どこにいても、共同体内外で作上げられたアフリカ系アメリカ人というステレオタイプから自由になれないことにトニーは苛立ちを見せた。

このような経験が一般的に“racism”（人種差別）という概念で説明されてきたことについて触れながら、その一言の複雑な意味や背景を子どものときから理解しなければならぬなんて理不尽だとトニーは言った。そして、最後に納得できない、やりきれないといった口調で、どうして自分がアフリカ系アメリカ人の子どもだからといって、周りの大人がいうように自分自身の文化だけに目を向けなくてはいけないのか、どうして近隣の日系の人たちの歴史に関心を寄せたり、日本語を勉強したりしてはいけないのかとつぶやいた。

このトニーのつぶやきのような問いかけを博物館展示にかかわる者、ひいては人類学にかかわる者はどのようにとらえたいのだろうか。筆者が考えるとそれは、どうして社会的弱者とみなされる者は自分自身を表象するということにおいてのみ当事者性を発揮することが期待され、自分以外の他者とかわりあいを持つなかで、その他者についての表象や知の生産に関与することが歓迎されないのかという問題提起につながる。いうまでもなく、トニーのつぶやきから見出されたこの問題提起は、トニーの祖先がアフリカ大陸から北米大陸に奴隷として連れてこられ、数世代を経てサンフランシスコの一定地区に定住するようになるまでの軌跡から切り離されるべきものではない。より普遍的な言い方をすれば、社会的弱者と位置づけられる人びとをめぐり、これまで組みまれてきた奪われた当事者性を取り戻すという意識や運動の社会的意義は、この問いかけの前において小さくなるものでも否定されるものでもなく、積極的に評価されるべきものであり続ける。そのうえで問題とするのは、当事者性のあり方の多様性であり、それに対する寛容の必要性である。エスニックな属性やそれに基づく集合的なアイデンティティの多様性の文脈に頼りすぎると、多様なものが錯綜する社会が現実として生み出している生々しく繊細な異種性の重なり合いの部分が、非常に単純化された機能的な

意味合いでしか見えてこない。

自分がどこから来たのかを忘れずに、自分とは異なる社会的、文化的背景をもつ人びとと触れあい、その人びとを理解しようとする欲求をもつことやそれを満たす営みは、特別に時間やお金をかけて日常の暮らしの場を離れ、非日常として異文化を経験する一部の旅行者や研究者にのみ開かれた特権ではないはずだ。人類学的な営みを限られた人びとの特権的な行為として一方的に位置づけ批判するだけにとどまらず、もっと様々な人びとが日常的に行なっている人類学的な営みに目を向け、より開かれた方向に位置づけていくような実践的な取り組みはできないのか。異文化理解や他者表象という人類学的な知の営みのプロセスは本来、誰にとっても身近であってよいことを再認識するきっかけを作りたい。通常は海外をフィールドにして調査をしている筆者が「多みんぞくニホン」の展示に関わることにした動機の一つはここにあった。

3 子どもコーナーとのつながり方

フィールド先のサンフランシスコで「多みんぞくニホン」を見たという人と知り合った。彼女の展示に対する感想は、展示を担当した人のネットワークが如実に反映されていたというものだった。彼女は自らが在日であるということを理由にして、特に在日コリアンのコーナーを見てそう思ったと話した。確かに、「多みんぞくニホン」のプロジェクトメンバーの多くは、自らが日本以外の外国にルーツをもっていたり、国内のエスニック・コミュニティで長らく研究や支援活動に従事してきたりして、それぞれに築き上げた人的ネットワークをもっていた。そして、展示するものがない状態からはじまった「多みんぞくニホン」では、各コーナーの担当者がその自ら持っているネットワークを頼りに作業を進めることが期待されていた。

一方、筆者の場合は、国内において特定のエスニック・コミュニティと強い結びつきがあったわけではなかった。それでも、この特展にかかわることになったのは、これまでの生活における地縁の延長線上に接点をもった外国にルーツをもつ人たちとの関係性に依るところが大きい。なかでも、同じく1階に設けられた子どもと民族教育に関するコーナーに隣接して、城田愛さんが再現した吹田市立岸部第二小学校のパンダ教室は、筆者の中学校区内の小学校にある中国からの帰国児童を対象とした課外学級である。筆者が大学4年次にエスニック・メディアについての卒業論文を書いた際、話を聞きにいていたことがきっかけとなり、今回の展示協力につながった。

今回、担当した1階の入り口付近に設置された子どもコーナーは、2階のエスニック・コミュニティごとの展示への導入的役割をもつコーナーとして位置づけられていた。在日コリアン、在日中国人、在日ブラジル人、在日ベトナム人、在日フィリピン人といった各コミュニティ展示の担当者とも連携しながら、外国にルーツをもつ小・中学生

による絵、工作、作文などの作品および関連団体の活動紹介や写真を中心に展示を構成した。「子どもから子どもへのメッセージ」というコンセプトのもとで、展示品の創作者と同年代の子どもたちが展示を見に来ることを想定し、外国にルーツをもつ子どもも、そうではない子どもも各々の感じ方で作品に触れ、作品の創作者である子どもが伝えようとしていること、表現しようとしていることについて自由に想像をめぐらすことができるコーナーを目指した。

展示品の収集および展示のガイドラインとしては、1)「日本に暮らす外国にルーツをもつ子どもたち」2)「みんぞく学校で」3)「ちいきの学校で」4)「さまざまな人たちと一緒に」という4つのテーマを設けた。「日本に暮らす外国にルーツをもつ子どもたち」では、コーナー展示の趣旨についてのパネル解説を、「みんぞく学校で」では主に母語で教育を行なっている外国人学校からの作品を、「ちいきの学校で」においては、地域の公立学校で行なわれている民族学級や日本語教室などからの作品を中心に取り上げた。NPOやNGOほか、学校外での団体を通した子どもの取り組みについては、「さまざまな人たちと一緒に」で扱った。

「多みんぞくニホン」はその企画段階から学校単位で子どもたちが多くやって来ることが想定されていた。子どもたちのためのワークシートを作るという提案があったり、学校関係者に対する展示説明会も行なわれたりした。しかし、実際には時間的な制約も手伝って、図録やパネルの解説文をできるだけ平易な文章にすること以外は、展示を企画する側が特に子どもを意識したメッセージを展示に盛り込むということはなかった。子どもコーナーに限って言えば、展示を通して子どもたちに何かを教えるというような立場をあえてとることもなかった。

一般に、子どもはある程度、大人から差し出されたものは無条件で受けとらなければならない状況に置かれている。自発的に興味をもって展示を見に来る子どももいないわけではないだろうが、みんぱくに足を踏み入れる子どもの多くは、学校や家族に連れられてやって来るのではないだろうか。子ども時代を大阪府吹田市で過ごした筆者は少なくとも、小学生のとき、そうやって初めてみんぱくを訪れた。また、「多みんぞくニホン」にやって来る不特定多数の子どもたちのなかには、展示企画者側の想像の域を超える複雑な文化的背景をもった子どももいるであろう。特に展示開催期間中の大半をサンフランシスコで過ごすことがあらかじめ決まっていたため、子どもコーナーに関しては、担当者不在のまま一方通行的な展示公開の形をとらざるをえないことがわかっていった。展示を見に来る子どもたちとの対話やアフターケアを展示の企画担当者として、どこまで出来るのかについても限界と不安を感じていた。今、考えれば、このように繰り返された思案の継ぎ合わせの先には、何か具体的なメッセージをいかにうまく子どもたちに伝えるかということよりも、できるだけ多くの子どもたちに威圧感や疎外感を与えない展示にするためにはどうしたらよいかということが課題としてあった。

子どもコーナーに作品や情報を提供して下さった団体や学校の多くは、その各々の具体的な活動内容やアプローチの違いこそあれ、基本的には共通して外国にルーツをもった子どもたちの居場所作りを目指していた。ここでいう居場所とは、例えば母語を安心して話し、学べる場であったり、日本語習得や教科学習を自分のペースで進められる場であったり、同じような背景をもった子どもたち同士が気兼ねなく時間を過ごせる場であったりした。子どもコーナーにおいて、そのような学校内外の地域の活動にかかわる子どもたちを展示の中心に位置づけたのは、日本の社会において外国にルーツをもつ子どもたちの居場所がもっと広がっていくことを願うからに他ならない。しかし、それはただ単に外国にルーツをもつ子どもたちだけの特別な場所を拡大させることに収束されるようなものではなく、外国にルーツを持たない子どもや外国にルーツを持ちつつもそのような活動にかかわっていない子どもを含めて、多様な背景と個性をもつ子どもひとりひとりが「多みんぞくニホン」とつながっている主体として歓迎される場所を作るという意味においてであった。

展示品の収集は子どもコーナー担当者である筆者が協力を願えそうところへ直接、連絡し交渉をもちかけるという方法と、2階の各エスニック・コミュニティ展示担当者を通して集めてもらうという方法の両方で行なった。みんぱくの院生の紹介や親戚からの協力という個人的なネットワークも利用した。

4 「子どもから子どもへのメッセージ」が実際に意味したもの ——大人と展示と政治性

「子どもから子どもへのメッセージ」を主題としたにもかかわらず、子ども各個人と直接的にやり取りを交わすことは困難で、実際的な作業過程のほとんどは窓口となる大人同士の交渉によって進められた。しかし、ここで見逃してならないのは、その背景に展示対象となる子どもたちの安全性やプライバシー保護の問題が大きくかかわっていたことである。教師や親、支援者など、作品創作者の子どもを取り巻く大人の方々は、「多みんぞくニホン」や子どもコーナーの趣旨に理解を示し、協力的な対応を示して下さった。ただ当然ながら、外国にルーツをもつ子どもたちをいわれのない中傷や暴力からいかに守るかという観点から、その展示の仕方については非常に慎重な姿勢が求められた。その結果、合意に至った展示の仕方の例としては、具体的な個人名や学校名を出さないケース、全体の雰囲気はわかるが子ども一人一人の顔までは見えないような写真を選んだケースなどがあった。また、その対応を決めるまでのプロセスも場合によっては、親や所属団体の担当者といった作品を創作した子ども本人と直接かかわりのある範囲の大人の判断にとどまらず、学校長や教育委員会、民族団体の幹部などの判断や見解が影響を及ぼすこともあった。なかには、作品提供者側から公表の許可をもらって

たものの、展示公開が始まってから、展示を見に来た第三者的な関係者の申し出で、個人情報黒く塗りつぶしたのもあった。

子どもコーナーで使われた展示作品の多くは、「多みんぞくニホン」の展示のために特別に作ってもらったものではない。作品提供を依頼した学校や団体において、すでに制作され保管されていた作品の中から推薦があったものについて、空間的制約と他の作品とのバランスという点から取捨選択をおこない展示した。この過程においても、作品提供者側の大人とのやりとりにおいて、展示という場をめぐる政治性を意識する場面がいくつかあった。

「子どもから子どもへのメッセージ」というコーナー趣旨のもとで、子ども個人が表現する世界に焦点を置くという展示のスタンスには、エスニック・コミュニティをめぐる政治的な対立関係や一定の方向性をもったイデオロギー的主張のみに収束しない視点で多様性のあり方を示したいという展示企画者側のもくろみがあった。また、一部の団体の活動を事例として取りあげるうえで、その団体の政治的な立場が「多みんぞくニホン」全体の主張として解釈されるような展示の仕方もできるだけ避けたかった。展示企画者側のこうしたもくろみは「多みんぞくニホン」が国立の博物館において開催されたこととも無関係ではない。しかし、展示の交渉を進める中で痛烈に認識させられたのは逆に、国立民族学博物館での展示に協力するということに対する作品提供者の大人の側からの意味づけであり、もくろみの方であった。そして、そのもくろみが露わになる状況は往々にして、提供された子どもの作品について、いくつかの質問が展示企画者側から作品提供者側に向けられる局面をきっかけとして立ち現れた。言語による直接的な対話やぶつかりあいに発展したケースもあったが、そこまで到達しなかったケースもあった。

しかしながら、ここで強調したいのは作品内容の操作に関する事実関係やその是非ではない。このような場面に直面することによって強く認識させられたのは、「子どもから子どもへのメッセージ」というコーナー趣旨が前提としていた政治やイデオロギーから自由な存在としての子どもという位置づけが予想はしていたこととはいえ、いかに浮世離れた無邪気さに基づいたものであったのかということだ。子どもを大人とかかわる日常性から引き離れた文脈など、そもそも現実的に意味をもたないからである。

5 ひとつにまとまらない「多みんぞくニホン」と人類学をつなぐもの

「多みんぞくニホン」はモノよりも理念が先行した展示であるといわれてきた。現に、このプロジェクトチームのメンバー・協力者たちはそれぞれの立場から、「多民族化」、「在日外国人」、「共生」、「多様性」、「マイノリティ」、「多文化主義」、「エスニシティ」、「多文化社会」といった概念やキーワードが包括する諸問題に取り組みながら、さまざま

まなルーツをもつ人たちの生き方が尊重されるような社会のあり方を模索してきた。

しかし、このような同じような志向性をもつ集団でありながら、実際にともに一つの展示を作り上げていく過程においては、プロジェクトチームのメンバー・協力者それぞれの見解や立場のあり方の共通点より、むしろ差異の方に自身の関心が注がれがちであるということを再認識した。いつのまにか筆者自身のなかで「まとまりのないまま作り上げた一つの展示」というイメージが生まれ、そのイメージに戸惑いながらも、それを「多みんぞくニホン」が目指す多様性の寛容のプロセスとして理解しようとする自分があった。

もちろん、展示を作り上げるなかでの実際的な接触や摩擦を通して、改めて、さまざまな解釈、立場性、方法の存在を認識したことは事実である。ただ、それには、文献を通じて立場の違いを認識したり、学問的に批判しあったりといった、理屈で説明できるような次元の気づきと異なる感触を伴っていた部分があった。それゆえに、必ずしも同じような背景や関心をもつ者同士がうまくやるとはかぎらないという現実の一側面が、ひとつにまとまらない「多みんぞくニホン」というイメージと結びつき筆者のなかでいたずらに膨らんでいった。

ところが、今、振り返ってみると、そのイメージから筆者が想起させられた関係性は、必ずしもプロジェクトチームをめぐる人間間の摩擦や不協和音ばかりを示すものでもなかった。基本的にはエスニック・コミュニティごとのコーナー単位で展示は作られていったが、その単位を縦断するような協力関係が生まれていたことや、変わりつつある関係性を反映した常に変化していく展示のあり方に見ていたのは、ひとつにまとまらない「多みんぞくニホン」が放つ求心力であり、そこに集まる人びとの間の結びつきであった。そして、つながったり、離れたり、結びつきが弱まったり、強まったり、そのようなプロジェクトメンバー間の関係性の連続のなかで、多様な人びとがいるということを知ると同時に、多様なつながりの形があることを学んだ。

普段の日常生活の文脈に立ち返ってみると、このようなつながりの形は何も特別なものではなく、むしろ極めて常識的でありふれたものであろう。研究や展示という場において取り上げられることもほとんどない。「多みんぞくニホン」の趣旨に沿うかたちで例を出せば、互いに異なる人間同士のつながりは「民族集団間関係」という構造的な枠組みで捉えられるのが一般的で、移ろいやすい日々の人間関係はあまりにも私的であたりまえで、社会的な問題を考えるうえで役に立つようなものではないと考えられる傾向がある。このような動向は「多みんぞくニホン」において意味する多様性の認識方法とも深く関連している。

在日コリアン、在日中国人、在日ブラジル人、在日ベトナム人、在日フィリピン人というそれぞれに独立した共同体ベースの展示が核となり構成されたことからわかるように、「多みんぞくニホン」の展示の枠組みは基本的に文化相対主義に基づいた多文化

主義という考え方を具現化するものであったといえる。まず、日本のなかにそれぞれ独自の文化的体系をもったマイノリティとしてのエスニック集団があり、その集団内にまたさまざまな背景をもった人びとがいるという見せ方である。いうまでもなく、このような枠組みは日本という地域的文脈においてのみ利用されているものではない。日本よりも早く、社会の多文化的状況が政策的な公的領域との関連で認識されるようになった欧米の都市国家において、長らく使われてきたモデルと重なるところが多い。グローバルイゼーションやトランスナショナリズムと呼ばれる昨今の世の中の動きに呼応して、移動する人びとが増えるにつれて、多文化主義という欧米から生まれた概念も国境を越えて、今やまるで普遍的に意義をもつ価値体系であるかのように迎え入れられ議論の種になっている。

一方、サンフランシスコという北米の都市社会をフィールドに調査を続けていると、こうした公式なあり方に関わる多様性の表象からは見えにくい多様なつながりの形がたくさんあることに気づく。たとえば、先に述べたアフリカ系アメリカ人というアイデンティティを持つトニーが近隣のジャパンタウンの日系スーパーでラムネを買う習慣があったり、日本の植民地時代に日本語を覚えた韓国出身のおばあさんが、かろうじて日常会話程度の日本語ができる日系二世の薬剤師さんに薬を処方してもらっていたりする。日々の営みに埋没しているかのように見えるこれらのつながりをたどっていくと、人びとの生活のなかに浸透しつつある商品価値としての文化の側面や、ポストコロニアルな歴史的状況、差別の重層的な構造なども見えてくる。

このような異種混濁的な日常風景は、小田が生活の場に見出す「境界や起源に先行する異種混濁性」につながるものであるといえよう（小田 2003）。それは、閉鎖的で排他的な共同体像を解体するツールとして称揚されてきた概念としての異種混濁性とも、リベラリズムの名のもとに個の多様性を一様に市民という次元に還元してしまう立場とも異なるように思われる。ここで強調されるのは、人びとが相互性のある関係性を通して、実際に生活の場で作りあげている隣接性から社会的な絆や共同体を見ていく姿勢である。

一般に、多様性の理解というと、イデオロギーや身体的特徴、国籍、社会階層、宗教など、人びとの間に確認できる差異をとらえるためのあらゆる要素を取り出して、できるだけ緻密に人を分類することが求められる。しかし、「多みんぞくニホン」が象徴するものを展示という領域を超えて捉えようとするとき、そして理念ではなく生きる術として多様性の寛容を考えると、重要性を帯びてくるのは区別や分類の発想ではない。つながりや相互関係性という視点である。隣人と異なる存在であることを自覚しながら、それでもその隣人とどこかでつながりながら生きている、生きていたいという現実的な感覚や欲求は、どのような社会においても、多様で異種混濁的な日常性を絶えまなく生み出している。そして、この感覚や欲求こそが様々な批判や自省を経ながらも、

フィールド・ワークという身体性をともなう相互関係の構築を通した「他者の文化」理解にこだわってきた人類学と「多みんぞくニホン」をつなげるものではないだろうか。

謝 辞

最後にこの場を借りて、子どもコーナーにご協力いただいた皆さんにお礼を述べさせていただきます。ひとりひとりのお名前を挙げることは本報告書で述べた理由から控えますが、作品を提供することに同意してくれた子どもたち、そして、その子どもたちの作品を筆者に紹介して下さった団体や学校の職員および支援者の方々にお礼申し上げます。また、総合研究大学院大学文化科学研究科の先輩である高正子さんにはご紹介やご助言をいただきました。ありがとうございました。

注

- 1) Caucasoidの類語で白色人種を指す。米国では1980年代ごろから、ポリティカル・コレクトネス (PC) と呼ばれる運動が徐々に広まり、多文化主義的な観点において差別的であると思われる従来の表現を「政治的に妥当な」表現に言い換える必要性が広く一般にも認識されるようになった。このような流れのなかで、従来の白人の呼称であった“White”にかわり“Caucasian”が使われるようになった。
- 2) バナナクリームを詰めたチョコレートクッキーの商標名のことだが、外見は黒くて中身は白ということから、白人のようにふるまう黒人という意味の蔑称として使われることがある。アジア系の人びとに対して使われる同じような言葉として、バナナがある。
- 3) 同性愛者の意。トニー自身は自分のことを異性愛者であると認識していた。

文 献

小田 亮

2003 『日常的抵抗論Web版』 <http://www2.ttcn.ne.jp/~oda.makoto/mokuji.12.10ed.htm> (2005年10月)。

楠瀬桂子・洪 炯圭編

1999 『ひとの数だけ文化がある—第三世界の多様性を知る』東京：第三書館。

小谷幸子

2004 「多みんぞくニホンをいきる子どもたちへ」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，16-17頁。

中澤まゆみ

1998 『ユリ 日系二世 NYハーレムに生きる The Life and Times of Yuri Kochiyama』東京：文藝春秋。